京都大学学術情報リポジトリ
KURENAI 紅
Kyoto University Research Information Repository

京都大学
KYOTO UNIVERSITY

Title	西晋の詩人張協について
Author(s)	一海, 知義
Citation	中國文學報 (1957), 7: 92-133
Issue Date	1957-10
URL	http://dx.doi.org/10.14989/176667
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

Kyoto University

中國文學報　第七册

西晉の詩人張協について

一海知義
京都大學

一

陶淵明の詩は、彼の生きた時代、東晉から宋へかけての文學の主流から、はなれた所で生み出されたもの、とされている。さらに廣くは彼の生きた時代をもふくめて、魏晉南北朝とよばれる時代の文學の主流からもはずれたもの、それ故にこそ、また彼の詩が、その獨特の光輝をはなちえたし、そして以後千數百年もの間、各時代のひとびとの胸にうつたえる力を、その詩的形象の中にもちえた、とするのが、一應普遍的に認められた評價のようである。そしてそれは、基本的には正しいであろう。たしかに彼の詩は、そしてまたそれのもつ思想は、當時の、修辭を至上のものとする、いわば形式主義的な文學の主流とは無緣な要素を多くもち、それが彼の詩に、獨自の性格を與えているといつてよいであろう。しかしながら、そうした評價は、いきおいその獨自性の强調へと傾きやすく、彼の詩を、文學史上に、ひとりそびえたつ金字塔のごとくに、孤立させて考え、彼が過去の大小の詩人から吸收し發展させたものに眼をむけることを忘れ、そうすることによつて、かえつてその眞價を見失う危險性が、ないではない。

したがつて、陶詩の中に見出される、當時の文學と異質なものと同時に、同質なもの、いいかえれば、彼の廣い意味での周邊の詩人たちの作品と、彼の詩が共有するさまざまな要素、あるいは單なる共有でなく、そこに淵明による發展のあとがあるとすれば、そうした點、すなわち具體的には、その思想、發想の仕方、形式の面でいえば、句法、さらには用語等々、の解明が行われねばなるまい。陶淵明の詩を、ひとり高しとすることによつて、かえつてその眞價を見失う傾きは、こうした研究のつみかさねによつて、是正されるであろう。

梁の鍾嶸が「その源は應璩に出ず」とした陶詩の源流に

ついての指摘は、論證を伴わぬ單なる指摘にとどまつたけれども、早い時代のそうしたこころみの一つであつた。それが充分に正しかつたかどうかは別として、それ以後先人たちが、この仕事を充分に深めて來たとはいいがたい。そして近來それは日本の學者たちによつてもなお採りあげられている。橋川時雄氏による應璩の研究（「陶淵明文學の源流を探る」人文研究五卷六號、一九五四年六月）、佛教との親近性を說いた吉岡義豐氏の「歸去來の辭について」（本誌第六册、一九五七年四月）、また、單に陶詩の源流としてでなく、いままで正面から採りあげられなかつた詩人應璩の作品を、可能なかぎり復原することによつて分析評價を加えた吉川幸次郎氏の「應璩の百一詩について」（京都大學文學部五十周年記念論文集、一九五六年十一月）などが、それである。

ところで、鍾嶸の詩品が、中品にクラシファイした陶淵明の條で、その源は應璩にいずといいつつも、さらに左思にも言及しているように、陶詩の源流は、複數の詩人たちに擬せられねばならぬであろう。左思の詩は、そうした複數の詩人たちの作品の中で、ある比重をもち、多くの問題をふくんでいるようである。しかしながら、ここでは、陶詩の源流を探るわたくしなりの最初のこころみとして、左思と同時代の詩人張協を、採りあげてみたいと思う。

西晋の詩人たちの作品を讀んでいく中で、わたくしが、特に張協という詩人に注意を惹かれたのは、その詩の中に用いられたいくつかのことばの、陶詩のそれとの類似、という單純なことからであつた。たとえば、淵明がしばしば用い、彼の思想を知る上で重要な意味をもつと思われる「眞」ということば、長沮・桀溺という淵明の理想とした古代の人物の物語に典據をもつ「耦耕」、これもまた頻用される「固窮」という語、そのほか、至人・達人・前脩・道勝、そしてまた、流俗・離群といつたことばづかいなど、張協の現存するわずか十數首の詩に、そうした用語の類似は、あまりにも多く見出される。

しかしながら、詩全體から感じとれるものは、陶詩との間に、しかく濃厚な關聯を示すものではない、というのが、最初のわたくしの印象であつた。ところがその後、彼の作品を今度はすこしく詳密に讀む機會を得、さらに傳記その

他をもしらべてみて、この詩人と淵明との間に見られる類似が、單にその用語の上にだけ示されるものでないことを知つた。たとえば次にあげる詩のごときは、淵明の詩とその思想がもつ、ある一面の原型を示しているように思われる。

結宇窮岡曲　宇を窮岡の曲に結え
耦耕幽藪陰　幽き藪の陰に耦耕す
荒庭寂以閑　荒き庭は寂として以て閑かなり
幽岫峭且深　幽かなる岫は峭しくして且つ深し
凄風起東谷　凄風は東の谷より起こり
有渰興南岑　渰としてくもの南の岑に興こる有り
雖無箕畢期　箕と畢のほしの期うことなしと雖も
膚寸自成霖　膚寸にして自のずから霖を成す
澤雉登壟雊　澤の雉は壟に登りて雊き
寒猿攡條吟　寒ちかき猿は條を攡して吟く
溪壑無人跡　溪壑には人の跡なく
荒楚鬱蕭森　荒る楚は鬱として蕭森たり
投耒循岸垂　耒を投じ岸に循うていと垂るれば
時聞樵采音　時に聞こゆるは樵采の音
重基可擬志　重いなる基は志に擬うべく
廻淵可比心　廻る淵は心に比すべし
養眞尚無爲　眞を養うは無爲を尚び
道勝貴陸沈　道に勝るるは陸沈を貴ぶ
遊思竹素園　思いを竹素の園に遊ばしめ
寄辭翰墨林　辭を翰墨の林に寄く

（雜詩第九首）

なお、この文章を書きすすめていくなかで、かたわら若干の文獻にあたつてみたところ、張協と淵明とを無緣の詩人でないとする說の、皆無でないことを、わたくしは知つた。すなわち、淸の何焯は、協の雜詩を評して、

胸次の高く、言語の妙なることよりして、景陽（協の字）と元亮（淵明の字）の兩晉に在るは、蓋し猶お長庚・啓明の天を麗るがごとし（義門讀書記）。

と、二人の詩人を、宵の明星と曉の明星にたとえている。群星のいまだ現われぬ、あるいはすでにその光を沒した時刻に、ただひとつ中空に輝く星、とする比喩は、はなはだ

暗示的であり、かつ深い寓意をもつように思われる――太陽の輝く光の世界を、詩が本來の機能を發揮した時代、とおきかえ、その光のうすれおとろえた時に、なおかすかな光を放つている詩人、また、やがて來たるべき光の時代を約束するかのように、時代に先んじて現われた孤獨な星、とまでその寓意をさぐるのは、穿鑿にすぎるとしても。

また、おなじく清の陳祚明は、淵明の雜詩に注して、

雜詩の諸篇もまた擬古の餘緒、その聲調を味わうに、稍や張孟陽兄弟の一流に近し（采叔堂古詩選晉六陶淵明二）。

という。これは、直截な指摘である。

しかし、兩者は直ちに結びつけて考えうるほど、その關係が濃厚なわけではなく、わたくしの最初の印象に、いささかの訂正を要する程度のもの、と考えてよいであろう。この詩人の、あるいは作品のもつ問題を、すべて早急に淵明に結びつけて說くのは、危險である。むしろそれは第二の問題としつつ、從來の文學史家によつて、二三行の敍述をしか與えられなかつた詩人、ことに西晉の詩人たちの中の一人を、一應正面から採りあげてみる、そうしたこころみの一つとして、わたくしはこの論文を書いた。陶詩との關聯の問題は、テーマではなく、あくまでも、モチーフとしてあらわれるにすぎないことを、あらかじめことわつておきたい。

二

晉書本傳によれば、張協には、一人の兄と、一人の弟があつた。載（字は孟陽）と亢（字は季陽）が、それである。人人は、かれらを、陸機・陸雲兄弟に對する呼稱、二陸にならつて、三張とよんだという。それは、すぐれた文人に對する一種の尊稱でもあつたようである。しかしながら、晉書の記事にも見えるように、弟の亢は、その才藻、二昆すなわち二人の兄に逮ばなかつた、といわれ、その作品も、北堂書鈔（卷一百四藝文部紙）に五言詩の斷片が見えるのみで、[註一] それらは既に唐初においてもはや顧みられなかつたことがわかる。こうしたことから、彼は三張の中からはずされ、かわりに、當時、張という姓をもつもう一人のすぐれた文人、張華（字は茂先）をこれにふくめる、という說が、

從來行われて來たようであり、近人では、鄭振鐸、李長之らがこれに從つている。[註二] この說は、詩品に見える鮑照についての次のような評語によつて、更にその基礎を得たのではないか、と思われる。すなわち

その源は二張に出ず……景陽の俶詭を得、茂先の靡嫚を含む。

しかしながらこの呼稱は、必ずしもただちに三張という呼稱とは結びつきえないのであつて、二張・三張という呼稱は、それぞれにふくむ內容を異にしていると考えた方が、より妥當であろう。しかも、あきらかに張氏兄弟を指して三張とよぶ呼稱を、われわれは、ほかの文獻にも見出すことが出來る。すなわち、時代は大分降るけれども、宋の樂史の撰した太平寰宇記卷六十三の記事がそれである。

信都縣に三張の宅あり、晋の文士張協兄弟三人、文を屬ることを善む。みな郡の人なり。語にいわく、「二陸入洛して、三張その價を減ず」と。

ここでわれわれは、張載兄弟に對する三張という呼稱をたしかめうると同時に、更に次の三つの點に留意すべきであろう。すなわち、三人の兄弟は、まん中の協をもつて代表させられていること、「二陸入洛、三張減價」という俗間の語、そして、彼らの原籍。前二點については、のちにまたふれるとして、ここでは、その原籍について考えてみたい。

張載、字は孟陽、安平の人なり。

というのが、晋書本傳の記事であるが、文選に見える張載七哀詩の李注が引く臧榮緖晋書は、「武邑の人なり」とする。また淸の嚴可均は、何にもとづいたのか、「安平灌津の人」としている。ところで、晋書地理志には、冀州に屬する郡の一つに安平の名が見え、同じく職官志に、惠帝の叔父にあたる司馬孚がここに封ぜられた、とある。すなわち、晋では安平國とよばれ、地理志には、これに屬する縣として、信都・武邑・觀（灌）津などの名があげられている（淸の洪亮吉補三國疆域志の記事もほぼこれに等しい）。[註三] さきにあげた太平寰宇記、またのちの畿輔通志などによれば、これら郡縣の名は、たびたびの王朝交替、それに伴う戰亂によつて、互いに錯綜しており、張家の原籍について、諸

說のあるのも、そのためであろうが、當時の安平郡武邑縣は、今もそのままの縣名でのこつており、河北省の北端、山東省の德州市にほど近い小都會である。

ところで、すくなくとも兄の載は、成人ののち、當時の都洛陽に出ていたものらしく、のちにもふれるように、武帝泰始の末（二七三）、あるいは、すくなくとも咸寧年間（二七五―二七九）には、既に文人として名を成していたらしい。そして、さきにあげた「二陸入洛、三張減價」という俗間の語や、本傳に見える官職の名からして、のちには弟たちもまた、ともに都にいたものと思われる。そして、彼らはその晩年、おそらくふたたび故郷の地に落着くことはなかつたであろう。なぜなら、惠帝の沒後（三〇七）、といえば武帝太康年間の政治的小康狀態がもろくも崩れて、ふたたびはじまつた混亂、いわゆる八王の亂が、ようやく終束をつげたころ、張兄弟の故郷の地、冀州は、羯人石勒の軍隊にふみ荒され、さらに十數年ののち、東晉の太興二年（三一九）、石勒はこの地をもふまえて、趙の國をたてたからである。

弟の協が、黃門侍郎に召され、疾いに託けてこれを辭し、以後一切の官職からはなれる決心をするのが、丁度この羯族侵入の年とかさなる。政治の場からはなれると同時に、彼はその故郷の地へも歸れぬ境涯におかれたわけである。當時の形式主義に流れた文學の製產者の群れの中の一人であつた張協の作品から、何ほどかのリアリズムと、眞實の情感とを、われわれが感じとることが出來るとするのも、そうした彼の境遇と無關係には論じえないであろう。

彼らの家は、その故郷にあつて、名門のうちにはかぞえられなかつたらしく（前出太平寰宇記姓氏の項に張氏の名なし）、本傳はわずかに收（太平御覽卷五百九十引王隱晉書は牧に作る）という父の名を書きとどめるにすぎない。そしてその官職は、蜀郡の太守という。劉備以來の蜀が晉の將軍鍾會によつてほろぼされたのは、二六三年のことであるから、それは當時占領直後の土地であつたであろう。そこの太守、それは、たとえば沖繩の軍政長官のごとく、あまりおだやかな職ではあるまい。

彼らの家が文學の傳統をもたなかつたと思われるだけで

なく、冀州という地方が、そもそも文化的傳統とは無緣な土地であつたようである。漢代の學者董仲舒、時代は降るが唐代の學者孔穎達は、共にこの冀州出身であるが、すくなくとも文學的傳統にはかけると考えてよく、同時代の一應名のある文人としては、ただ一人牽秀という人物が灌津の人であつた、と晉書にしるされるにすぎない。後漢王朝の絶對權力者であつた竇太后が、灌津の人である、と歷史はしるしているが、それはこの際、かえつてあまり名譽なことではあるまい。この土地が、當時經濟的にも未開の地方であつたことは、いうまでもなかろう。文學者のおおむねが江浙から出た清朝でも、その末期には、文人が必ずしも江浙の出身者によつて占められなくなつた事情と考えあわせてみて、政治的混亂が文學的風度に與える影響の一端をうかがわせるように思われる。しかしそうした邊境から生れた文學が、後の清朝のそれとはちがつて、この場合、ただちに支配者への積極的な批判の文學とならず、消極的な姿勢、あるいは逃避へと傾いていつたことについては、時代的制約を考慮に入れなければならないが、しかしそうした消極的姿勢、あるいは逃避の中にも、その作品を形式主義的文學の枠からはみ出させるエネルギーのあることを、われわれは見落してはならないであろう。抑えられた情感が、ひそやかではありながら、抑えられたことによつて、かえつて眞實なものを祕めているかも知れない、そうした作品を、われわれは見すごしてはならないし、そのためにも、この時代の作品を、形式主義的文學として一概に捨てさらず、もう一度詳密に檢討してみる必要があるように、わたくしには思われる。

三

張協の生涯について、そのくわしいことは、ほとんどこれを知ることが出來ないが、ここでは若干の資料によりつつ、探つてみたい。[註一]

まず晉書本傳の記事によれば、

張協、字は景陽、少くして儁才あり、載と名を齊しくす。公府の掾（三公の府の屬官）に辟され、祕書郎に轉ず、華陰（潼關の西にある縣）の令、征北大將軍が從事中郎に

補せられ、中書侍郎に遷り、河間（河北省）の内史に轉ず、郡（役所）に在りては清簡寡欲。時に天下已に亂れ、在る所、寇盜あり。協、遂て人の事を棄て絶り、草澤に屏き居まう。道を守りて競わず、屬り詠うことをもつて自ずから娛しむ。諸文士に擬して、七命を作る。その辭にいわく云云。世もつて工みなりとなす。永嘉の初、復た徵されて黄門侍郎と爲る。疾いに託けて就かず、家に終る。

引用された作品をはぶけば、これが、その傳の文章のすべてである。もちろん生卒の年は、まつたくわからない。しかしここに、ただ一カ所ではあるが、年數が明記されている。「永嘉の初」、それは前章にもふれたように、晉の王族の内紛に端を發し、混亂の中で多くの人民の生命と財産を破壞しつくし、さらに張華、潘岳らすぐれた文人の命をうばつた、いわゆる八王の亂が、ようやく終りをつげた、そのあくる年（三〇七）にあたる。この年、西晉の王室の一族瑯邪王司馬睿（のちの元帝）は、都督揚州江南諸軍事として、建業（今の南京）に軍鎭を移し、すでに東晉の基礎を築きつつあつた。この八王の亂の或る期間、張協はやはり王族の一人である河間王顒の下で、その地の長官をしていたと考えてよかろう。「時に天下已に亂れ、在る所寇盜あり」という記事が、そのことを示している。そこでまのあたりにしたであろう現實、それが彼に、次の官職を固辭させたものと思われる。

その後數年にして（三一一）、洛陽は西晉支配階級の内亂に乘じた匈奴の劉聰、羯族の石勒ら連合軍の手に陷ちた。西晉の最後の皇帝、愍帝が殺され、さきの司馬睿が東晉の王朝を江南にたてたのは、さらにその數年後、三一八年のことである。永嘉の初から約十年、張協がその混亂に如何に處したかは、全く不明である。しかし、本傳の記事によれば、彼の文學活動は、その間もつづけられたのであろう。今に殘る作品が、そうした期間のものをも含むかどうかは、疑問であるとしても。

南渡以後の東晉に關する文獻に、協の名が見えないのは、たとえ彼がその頃まで生きていたとしても、揚子江をわたつて南方に逃げた文人たちの中に、彼が加わつていなかつ

たことを示すであろうし、弟亢、「中興の初（三一七頃）、江を過る」とする本傳の記事が、兄のことにふれないのは、このことをたしかめさせるであろう。[註二]

以上が、本傳によつて知りうるほとんどすべてであり、張兄弟の行跡について、さらにいささかの事實を知るためには、兄の載の傳、あるいはその他かれらに近い時代の數すくない資料にたよらねばならないが、考證が煩瑣にわたるきらいなしとしないので、これを箇條にわけて簡單にのべたい。

㈠　文選の各ジャンルの中での詩人の排列は、その時代順に據ると、昭明太子の序は明記しているが、一つには、「各以時代相次」の時代が、詩人の生年を指すのか、あるいはその活躍した時期なのかは不明であり、二つには、たとえば卷二十二左思招隱詩において、李善が、雜詩では左が陸（機）の後にあり、ここで前に居くのは誤りである、と指摘し、また卷二十九何邵雜詩に附せられた李注が、贈答と雜詩における何・陸の順の不統一をいうごとく、前後錯雜している箇所もあるため、これによつて生年の順を斷定することは、不安なしとしない。しかし今一應これに據つて見れば、張協の詠史詩は、左思と盧諶の間に、雜詩は、張翰と盧諶の間におかれている。左思の生卒は不明である。盧諶は、本傳によれば二八四年――三五〇年。張翰もまた不明であるが、本傳の記事から二四六年以後の生れであることは、わかる。陸侃如・馮沅君著「中國詩史」は、張協の生卒をしるす唯一の文學史であろうが、それが何による推定であるかは、つまびらかにしない。しかし、二五五?――三一〇?とする推定のうち、沒年については云云するだけの資料をもたぬが、その生年については、文選の排列によつても、疑問符を附したまま、數年の幅をもたせて、一應うけ入れてよいようである。[註三]

㈡　本傳によれば、兄の載は、太康の初（二八〇頃）蜀の地に父を省ねた、とある。文選に見える劍閣銘は、その時の作品であるが、その李善注に引く臧榮緒の晉書には、父に隨つて蜀に入つた、とあり、いささか記述のちがいを見せる。それはともかくとして、この記事は、載がまだ何の官職にもつかぬ若い頃のことのように讀みとれる。吉川

教授の教示によれば、藝文類聚巻二十七に見える張載敍行賦の、「歳は大荒の孟夏、余將に蜀に往かんとす」の大荒とは、爾雅釋天の「(太歳)巳に在るを大荒落という」のにもとづいたものであろう、とのことである。とすれば、本傳の太康初年とする記事と考えあわせて、太康六年乙巳(三八五)を指すのであるかも知れない。この銘は、益州刺史張敏[註四]に認められ、その上表によつて、武帝はこれを石に刻ませたという(本傳及び臧榮緒晉書)。

㈢ しかし、載がその文才を認められたのは、これよりいささかさかのぼる。司隸校尉傅玄(二一七—二七八)は、載の濛汜賦を見て感歎し、車をもつてこれを迎え、日の沒するのも忘れて、大いに語りあい、かくて載はその名を知られるようになつた、と本傳はしるしている。司隸校尉傅玄が、その職を免ぜられたのは、武帝の伯母獻皇后の葬儀(武帝咸寧四年二七八)の席上、席あらそいをしたことによるという(晉書巻四十七及び巻三十一)。とすれば、濛汜賦は、二七八年より何年か前の作、より嚴密にいえば、傅玄が一つ前の官、太僕の職にあること一年に充たなかつたとして、二六九年(武帝泰始四年)から二七八年の間の作、であり、載の文名が中央の文壇に知られるようになつたのは、この間のこととしてよい。

㈣ 以上に示した記事あるいは考證と、いささか矛盾を來たす記述が、同じ晉書の文苑傳に見える。

(左思)三都のことを賦せんと欲せしに、會たま妹の芬、宮に入り、家を京師に移す。乃ち著作郎張載のもとに造り、岷邛の事を訪う(巻九十二左思傳)。

岷山邛江(共に今の四川省すなわち當時の蜀の山川の名)のことは張載にきけ、といわれるほどに、彼が蜀についての權威者となつているからには、その入蜀ののち、すなわち太康六年(二八五)以後、劍閣銘が世に知られてからのことでなければならない。しかるに左思の妹芬が、その文才によつて武帝の後宮に納れられ、修儀の稱をうけたのは、泰始八年(二七二)のことである(巻三十一左貴嬪傳)[註五]。「乃ち」という助字からして、左思が載を訪れたのは、芬の入宮ののちしばらくしてからであろうが、それにしても、張載傳、左思傳の間には十年前後の矛盾がのこる。

ところで文苑傳の次の記事は、さらにもう一つの矛盾を生む。左思は張載を訪ねたのち、構想十年、遂に三都賦を完成した。ところがそれの完成される以前に、陸機が吳の地から入洛しており、機もまた三都賦の構想を練つていた矢先であつたので、この計畫をきいて、はじめは北人に何が出來るものかと笑つていたが、完成された左思の賦を見て、絶だ歎伏し、この上に加うるがものなし、と自らの筆を輟てた、というのである。構想十年とすれば、完成したのは、太康三年（二八二）の頃、しかるに、晉書陸機傳は、その入洛を太康の末（二八九頃）とする。この場合は、その入洛を數年さかのぼらせて考えねばならぬことになる。ところで、陸機入洛の年について、晉書の示す所に疑念をはさんだ注家が、從來なくはない。これも吉川教授の教示によれば、文選集注に「鈔に曰く」として引く說、及び清の張雲璈の選學膠言は、それぞれこれを、十年（吳滅亡の年、太康元年二八〇）あるいは五年（陸機二十四歲の時、太康五年二八四）さかのぼらせて考えている。二說また矛盾するが、陸機の作品の示す所では、吳滅亡ののち、吳と洛陽の間を幾度か往復しているようであり、晉書の示す所は最初の赴洛ではなく、幾度かの往復ののち洛陽に落着くことになつたという結論的な敍述と見られぬことはなく、とすれば、後者のくいちがい、すなわち、左思傳と陸機傳の示す矛盾は、一應解決されよう。ところで、前者の矛盾、すなわち張載傳と左思傳の示すくいちがいについては、晉書の張載入蜀を太康の初とする記事が誤りであり、大荒とはもう一つ前の巳の年、すなわち泰始の末（二七三、癸巳）と考えることによつてしか解決されない。更にこれをたしかめる他の資料を持合わせない現在、かく本傳の記述をあらためるについては、不安なしとしないが、左貴嬪傳の記事が、宮廷に關するものであるだけに、より信憑性をもつものとしてこれをそのままうけとれば、左思が入洛後しばらくして張載を訪ねたとして、その事實に關する矛盾は、一應解決されるわけである。すなわち、載は泰始末年から咸寧初年の頃（二七五年前後）、最初の官職である著作郎として、その文名はすでにあらわれていた、と考えてよく、いささか亂暴ではあるが、二五〇年頃をその生年として推定して

も大過はないであろう。

㈤　陸機のことにふれたついでに、第二章で採りあげた太平寰宇記の「二陸入洛、三張減價」という俗間の語について、考えてみたい。これは、宋人によつて書きしるされたことばであるわけだが、唐人もまたこれを書きとどめている。すなわち晉書本傳の末尾に、

景陽、光を王府に擒べ、棣萼相い輝らす。二陸入洛するに洎んで、三張その價を減ず。遺文を考え覈ぶるに、徒語には非ざるなり。

というのがそれである。とすれば、これは當時俗間にいいはやされたことばであると考えてよいであろう。

このことばの示す意味を、逆に考えれば、二陸の入洛までは、三張が、當時の文壇にあつて、のちの二陸の占めたような最高の地位を保つていた、としてよいようである。とすれば、詩品序では「有晉太康中に迄んで、三張二陸兩潘一左、勃爾として俱に興る」と集約的にのべているけれども、そしてまた二陸入洛を太康の初とするか、末とするかは、今しばらくおくとして、張載が傅玄に認められた武帝咸寧年間から、次の太康年間にかけての數年、あるいは十數年が、張氏兄弟の中央における文學活動の最も盛んな時期であつた、と考えられる。しかしそれは、あくまでも當時の支配階級を中心にして形成された文壇の場での活動なりそれに對する評價であつて、宋書謝靈運傳論に、「降りて元康（太康の次の年號）に及び、潘陸、特に秀いで……遺風餘烈、事は江右に極まる」といわれるごとく、既に三張はその名を擧げられていないが、かれらの文學活動は、太康以後もつずけられていたと考えてよく、註六ことに張協の場合、「價を減じ」たのちに、かえつてすぐれた作品をのこした、と考えられることについては、章をあらためて、のべてみたいと思う。

四

ところで張氏兄弟は、三張と併稱されながらも、先人たちははやくからこれにいささかの優劣をつけている。末弟の亢について、その本傳は、才藻二昆に及ばず、と斷定しているが、前述のごとく、今にその作品をとどめないため、

評價のてがかりを得ることが出來ない。兄の二人については、人によつて、その優劣に關する議論と評價に、若干のちがいを見せているようである。

隋書經籍志は、載・協の集を、それぞれ七卷・三卷と記錄するのに對し、文選が、載については、詩三首、銘一首、協については詩十一首、七命八首と、弟の作品を多く載せているのは、弟の協を秀れたりとする、一つの評價を示すものであろう。これをさらにはつきりと示すのが、鍾嶸の詩品である。ここでは、協は上品に、載は下品にクラシファイされている。その序文に、協を潘岳と並べて、陸機と共に太康年間の代表的詩人であるとし、また文學史上代表的な意義をもつ作品の一つに、協の苦雨（藝文類聚卷二に引く、文選では雜詩第十首）をあげ、また、詩品の中で最高の評價を與えられている謝靈運、鮑照に、張協の體あり、あるいは、その源は協に出ず、とする記述は、協を高しとする評價を、さらに側面から強めている。そして鍾嶸は、孟陽（載）の詩は遠かに厥の弟に慚ず、と斷定するのである。過去の文學に對する批評的意義をもつとされる江淹雜體詩が、その三十首のうちに、協に擬した詩をふくみ、そうして載に擬した詩のないこと、さらに協をもつて三張を代表させた前出の太平寰宇記の記事などは、こうした評價をうけついだものといえよう。

しかしながら、詩品が評價の對象として採りあげたのは、詩、しかも五言詩に限られており、したがつて、すべてのジャンルの文學作品を對象とした劉勰の文心雕龍の議論は、必ずしもこれと似ない。すなわちここでは、協だけが特に採りあげられることはなく、むしろ載の方が、弟ときりはなして論じられている箇所さえある（銘箴篇）。そうしてその才略篇にはいう、

孟陽景陽、才は綺にして相い埒し。魯衞の政、兄弟の文と謂う可きなり。

明の張溥は、この評價をさらにはつきりした形で提出している（漢魏六朝一百三家集張孟陽集題詞）。すなわち、二張は齊に詩文の間にその才を馳せたが、互いに長短あり、その文學的才能についていえば、ともに兄たりがたく、弟たりがたし、といい、協は文においては稍や兄に讓るが、

「詩は獨り勁出す」というのが、その議論である。今に遺る張氏兄弟の佚文を見、そして詩品、文心雕龍などの說を勘案する時、張溥のこの議論が、もつともおだやかであるように、わたくしには思われる。文選に採られた西晉の詩のうち、陸機の五十二首をのぞけば、張協・左思の十一首が、潘岳の九首とともに、他を壓して多いこと、また明の馮惟訥の詩紀以下、それぞれの立場からする總集の選擇評價も、この說の正しさをうらづけているようである。[註一]

五

詩品の張協の項にはいう、

その源は王粲に出ず。文體華淨、病累すくなし。又に巧みに形似の言を構え、潘岳よりも雄に、太冲よりも靡なり。風流調達、實に曠代の高手なり。詞彩葱蒨、音韻鏗鏘、人のこれを味わえば、亹亹として倦まざらしむ。[註一]

ここには、いくつかの重要な指摘がふくまれているように思う。

まず、周知のごとく、鍾嶸は、その文學批評の一つの方法として、詩人の系圖を作ることを試みている。評價の對象となつた詩人は、すべて國風・小雅・楚辭をその源とする三つの系圖のどこかにくみ入れられる。彼によれば、張協をふくむ系圖は、次のごとくである。

楚辭——李陵——王粲——張協——鮑照

李陵（上品）については、

文、悽愴多し、怨者の流れなり

という。すなわち、屈原と李陵の運命をもうらにふまえつつ、李陵の詩は、楚辭のもつパセティックな感情をうけついだとするのであろう。この指摘は重要であり、張協がそうした流れを汲むとするのは、意味深い示唆をふくんでいるようである。なぜなら、たとえば張協がその詩に、テーマとして、あるいは背景として、しばしば凋落の秋をうたうのは、あきらかに楚辭のもつロマンチシズムの流れをうけついだものとしてよく、また悲傷の感を深めるものとして雨を點綴した作品の多いことも、そうした傾向の一つと考えてよいからである。そしてそのロマンチシズムは、秋

の詩人とよばれる杜甫にもうけつがれ、雨の描寫をふくむ杜甫の詩、たとえば秋雨歎三首、秦州雜詩二十首のうちのあるものなどが、その作品のすぐれた部分を占めることも、興味深い。

王粲（上品）についても、鍾嶸は、

愀愴の詞を發す

と指摘する。しかしまた、

文秀で、質羸し

ともいう。すなわち楚辭のもつ悲愴感が、王粲においては、その素朴さ、力づよさを失い、それが粉飾され、やわらげられる傾向のうまれたことを、いうのであろう。鍾嶸によれば、王粲の系統は、張協をもふくめて、五人の詩人にうけつがれる。それぞれの詩人に對する評語から判斷するに、その悲愴感は、劉琨と盧諶に、そしてその粉飾されたきらびやかさは、潘岳と張華にうけつがれた、とするもののようである。張協は、どちらかといえば後者に傾きつつも、この二つの傾向をあわせもつていた、と考えてよい。左思よりも靡であるが、潘岳にくらべれば雄であるとする評語が、そのことを示している。そしてまた、その文體は華淨、すなわち華やかであると同時に、淨らかなものをもつ、との評語も、そのことを示唆するであろう。これらは、ごく大雜把な議論であること、いうまでもないが、理由のない斷定でもないようである。

左思よりも靡とする、その靡という評語は、六朝の文學評論の中でしばしば使われる。たとえば、陸機の文賦にはいう。

詩は情に緣うて綺靡、賦は物を體して瀏亮。

綺とは、質素に對して文綺、と對される（文心雕龍書記篇）ごとく、模樣のちりばめられたきぬ、という意であり、詩は、人間內部の感情に根ざしつつ、その機能は、綺靡、すなわちはなやかな、あるいはきらびやかな美しさを發散させることによつて、最高に發揮される、とするのが、その說である。綺靡 chi-mi とは疊韻のことばであり、それ自體すでに一つの裝飾的なひびきをもつ。これが、當時の詩の制作者自身の發言である。したがつて、評者が、そうした態度によつて作られた詩を、同じく綺、あるいは靡の

語をもつて評するのは、當然豫想しうることであろう。ところで文心雕龍は、そうした評語の對象を、楚辭にまで遡らせる。すなわち劉勰は、九歌・九辯を評して、綺靡もつて情を傷ましむ、という。鍾嶸の詩品が、パセティックな感情ときらびやかな表現との混合を、はじめて王粲に見出すのに對して、これは更に楚辭にまでさかのぼらせるわけで、さきの系圖とくらべあわせて考えると興味深い。劉勰はさらに、魏晉は淺にして綺（通變篇）、といい、東晉の詩人郭璞にも、綺巧という評語を與えている（銓賦篇）。詩品によれば、さらに降つて宋の顏延之、謝惠連、またその詩が綺であることを特色としたという。そうして唐人は、これを總括して、建安より來のかた、綺麗、珍とするに足らず（李白古風）、とうたう。詩が、きらびやかであることを特色とするのは魏晉南北朝という時代全體を支配した空氣である、とするのである。

しかしながら、なおこれを仔細に見れば、綺という評語は、晉、ことに西晉の文學に對して、より多くつかわれていることに、われわれは氣づく。さきにあげた、魏晉は淺にして綺、また流韻綺靡（時序篇）、そして、晉の世の群才、稍く綺靡に入る（明詩篇）など、すべて勰の晉詩にあたえた評價である。そうして二陸は、天才綺練といわれ（文選文賦李注引臧榮緒晉書）、潘岳、は清綺と評され（世說新語文學篇劉注引續文章志）、また機岳併稱して、縟旨、星のごとく稠り、繁文、綺のごとく合なる、といつた評語も、われわれは見ることが出來る（宋書謝靈運傳論）。さらにまた、博玄の子咸は、その文に「綺」の足らざることによつて、おとしめられている（晉書本傳）。そうした中にあつて、張協もまた例外ではなかつた。孟陽景陽、才は綺にして相い埒し、という文心雕龍の評語が、そのことを示している。

ところで、こうした評語は、何をそのうちにふまえているか。それは、さきにあげた、晉の世の群才、稍く綺靡に入る、につづく明詩篇の文章に暗示されている。すなわち、

張潘陸左、肩を詩の衢に比べ、その采は正始よりも縟く、その力は建安よりも柔らかなり。

建安の詩の、ごつごつした、洗練されきらぬ要素、またその故に存していた力强さ、それが失われて、裝飾的な、

外面的な美しさの追求へと傾いていつたのが晉詩である、とするのである。南齊書文學傳論は、晉代の文學を評した中で、若し新變なくんば、代わるがわる雄なる能わざらん、といつているが、二つの時代の文學が、同じく時の支配者を中心にしたグループによつて制作されたとはいうものの、魏の時代に存した、文人の發言のある程度の自由さ、時代的雰圍氣の新鮮さが、統一王朝である晉になつてからは失われ、上からの統一、二十四友というようなゆがんだ形での文學者の結集、そして王族の内紛や人民の不滿によつて生じた果てしない混亂が、詩人を、虛しい美の追求へとねじまげ、それをしも「新しい變化」とせざるをえなかつたことも、うなずけぬではない。

文心雕龍は、こうした傾向に對して、「淺」とよび、また、浮慧しきものは、綺を觀て心を躍らす（知音篇）、として、否定的評價を與えている。こうした評價と、さらに明人陸時雍の、人間の感情は詩によつてはぐくまれ、また眞實の感情によつてこそ詩は生れる、ということばは、晉人にとつてよい藥となるであろう――語曰、情生於文、文生於情、此言可以藥晉人之病（詩鏡總論、歷代詩話續編本）――とする評語に、わたくしもまた、おおむね賛意を表する。しかしながら、そうした風潮の中にあつても、詩人の情感は、必ずしもまつたく壓し殺されていたわけではない。

ことに、そうした詩人の群れの中でも、左思という人物は、眞實の感情を、自己の出身のまずしさとその不遇な環境に對する反撥や不滿として、眞率に形象化しえた詩人であるといわれる。詩品の陶淵明の項の、左思の風力を協なう、とすることばも、このことを側面から示すであろう。魏の時代の文學がもちえた風力、背骨のとおつた力づよさ、それを失うことのなかつた左思にくらべれば、張協はやはりいささか「靡」であつた、とするのが鍾嶸の判定であろう。そして、しかしながらこれを眉目秀麗の詩人潘岳にくらぶれば、雄雄しい詩的形象を創造しえた人物、とそう呼んでいるのであろう。

當時、九品中正の制度の施かれた中で、その政治目的にそうべく、人物を臧否する、すなわち人物推擧のために品

定めをすることが、さかんに行われたといわれ、正史の記事や、世說新語の多くの挿話が、その間の事情をつたえているが、鍾嶸が詩品を書いた時、そうした風潮から全く影響をうけなかつたかどうか、わたくしは、いささか疑わしく思う。すなわち、ここで與えられた評價が、純粹に詩人の作品のみを對象としたものであるか、すくなくともある場合には、その詩人の地位、あるいは人格や傳えられる行爲への評價が、たとえいささかなりとも混入されていはしまいか、という疑いである。陶淵明が、より多くその行爲によつてではなく、その詩によつて眞に評價されるのに、餘りにも多くの時間をかさねばならなかつた、という事實、詩品もまたその淵明評價において、前者への傾きを見せているという事實からも、わたくしの疑いは、うまれている。潘岳に對して、さきにわたくしがわざわざ眉目秀麗という形容詞を冠したのも、そうした心からであり、左思がその容姿は絶醜、世說文學篇や、劉注の引く別傳の記事の傳えるその人物もまた、才人潘岳とはあまりにも對照的であることがわたくしをいささか不安にする。とはいえ、この二人の詩を比較の對象としての、張協に對する評價は、おおむね妥當であろう。潘岳の詩に見える過剩な美的表現は、協の詩の纖細な敍景とは、その質を異にするものであり、左思が、同じジャンル、雜詩において、これまた同じく秋をテーマとしつつも、そこに示す力强いタッチは、やはり協には缺けるものだからである。

たとえば、綺靡と評される詩的表現は、充分に選擇されたことばを對照的につらねることによつて生み出される對句に、その一つの頂點を見出すことが出來るであろうが、潘岳の、

濫泉　龍の鱗のごとく瀾(なみ)だち
激波　連ねたる珠のごとく揮(そそ)ぐ（金谷集作詩）

などの句によつて代表される、きらびやかな表現、したがつて、對象の美を、直接目にうつたえる比喩を通してでなく、むしろ一種の濾過作用をもつ抽象的な比喩をもつてする表現は、張協にはすくなく、むしろ彼の對句は、

騰(あが)れる雲は涌(わ)く煙に似て
密(こま)かなる雨は散りたる絲の如し（雜詩第三首）

と、對句としては平凡さを露呈しつつ、その本領は、對象のこまかな、しかも如實な描寫において發揮されるように思われる。

秋に觸發された妻の死への悲しみ、また、妻の死が秋という季節に投影されたさびしさ、それをうたつた潘岳の悼亡詩のもつ頽れた美、それもまた張協とは無緣であるように思われる。張協には、もつと勁い一種の muscle が通つているようである。自らの不遇や孤獨を、單になげきとして發するだけでなく、抑えた消極的な形ではあるけれども、「至人は物に嬰わらず、餘風　時を染むるに足れり」（雜詩第三首）、あるいは「流俗　多くは昏迷す、此の理　誰か能く察せん」（第五首）というふうな自己主張も、その詩には見られ、また淵明の「憶う我れ少壯の時……、猛志　四海に逸す」（雜詩第五首）にも似た、「疇昔　微志を懷き、帷幕　竊かに經し所なり」（雜詩第七首）の如き詩句が、そうした張協の muscle の片鱗を見せているように思われる。しかしながら、これを左思にくらべる時、そうした勁さになお缺ける所の多いことを、われわれは認めねばなるまい。

たとえば李善が注して、賈充の記室にめされて就かず、因つて人の年の老いゆくに感じて作る、という左思の雜詩の全篇は、次のごとくである。

秋風何冽冽　秋風　何ぞ冽冽たる
白露爲朝霜　白露　朝霜となる
柔條旦夕勁　柔らかき條は旦夕に勁く
綠葉日夜黃　綠なる葉も日夜黃ばむ
明月出雲崖　明月　雲崖に出で
皦皦流素光　皦皦として素き光を流す
披軒臨前庭　軒を披きて前庭に臨めば
嗷嗷晨鴈翔　嗷嗷として晨鴈翔ける
高志局四海　高志　四海を局しとし
塊然守空堂　塊然として空堂を守る
壯齒不恒居　壯んなる齒も恒には居かず
歲暮常慨慷　歲の暮れなんとして常に慨慷す

これと同じテーマをあつかう張協の雜詩第四首を記してみると、

朝霞迎白日　朝霞　白日を迎え

丹氣臨暘谷　丹氣　暘谷に臨む
翳翳結繁雲　翳翳として繁雲を結び
森森散雨足　森森として雨足を散ず
輕風摧勁草　輕風　勁草を摧き
凝霜竦高木　凝霜　高木を竦ます
密葉日夜疎　密葉も日夜疎らに
叢林森如束　叢林は森として束ねたるが如し
疇昔歎時遲　疇昔は時の遲きを歎ぜしに
晩節悲年促　晩節には年の促るを悲しむ
歲暮懷百憂　歲の暮れなんとして百憂を懷き
將從季主卜　將に季主に從いて卜わんとす

まず、秋という季節を提示するそのうたい出しにおいて、協は、淮南子（說林訓）のことばをふまえつつ、おだやかであるのに對し、左思のそれは、「秋風　何ぞ冽冽たる」と、直線的に、秋のもつきびしさをうたいあげる。そして、白露爲霜という詩經秦風蒹葭の詩句をそのまま用いつつも、朝の霜と提示することによつて、秋のきびしさを一點に凝縮させる。そのうたいおさめもまた、左思が、壯んなる年のすぎゆくなげきを、なげきとしてくずれさせず、常に慨慷す、とある力强さを祕めるのに對し、協のそれは、漢代長安の卜者の故事をふまえつつ、暗示的で、よわい。

また、「疇昔　時の遲きを歎じ、晩節　年の促がすを悲しむ」という發想は、二句それぞれに類似した表現を古詩の中に見出しうるとしても、こうした對句のかたちでうたわれたのは、新しいことであろうが、それもやはり眞實の感情の表白としては、平板的とのそしりをまぬがれえぬであろうし、左思の、「高志　四海を局しとし、塊然　空堂を守る」――嚴しい空氣の中で、ぽつねんと自らの姿勢をくずさぬすがた――にくらべてみる時、その詩的表現における優劣は別として、やはり强靱なものに缺けるといわねばなるまい。

これは本題から多少はずれるが、左思雜詩第三句の、「柔條　旦夕に勁し」、すなわち柔らかであつた條條も、秋の空氣にふれて、日に日にそのしなやかさを失い、强靱なしわりを見せるようになる、とする秋の景物の採りあげかたは、いささか特異な發想を示すであろうが、張協もまた、

別の作品（七命）の中で、これを、「柔條は夕べに勁く、密葉は晨に稀なり」と、四字句に凝縮してうたつているのを見ると、この二人の詩人は、その作詩の場で、何らかのかかわりをもつていたのかも知れない。

さてここで、さらにそうした比較を、一一の詩句について行うことは、一應おいて、張協の詩の示すいくつかの問題を、最初にかかげた詩品の評語にもどりつつ、またこの雜詩をてがかりとしながら、章をあらためてのべてみたい。

六

巧みに形似の言を構う。

と詩品にいう、その形似なることばは、文心雕龍や宋書謝靈運傳論にも見える。

近代以來、文は形似を貴び、情を風景の上に窮い、貌を草木の中に鑽む（文心雕龍物色篇）。

（司馬）相如、工みに形似の言をなす（謝靈運傳論）。

そしてまた、詩品の謝靈運、顏延之、鮑照の項には、それぞれ「巧似を尙ぶ」という評語が見える。

それは、ものの形を、そのものに似せて、巧みにうつす、ということを意味するであろう。そしてこれを、今のことばにおきかえれば、寫景の、ひろくは抒情をもふくめての、リアルさ、ということになるであろう。今引いた文心雕龍の語とともに、詩品鮑照の項に見える「その源は二張（張協・張華）に出ず、善みに形狀寫物の詞を製す」という評語が、そうした解釋を許容させるように思われる。

ところで、六朝における詩文評をのぞけば、張協に對する後人の批評は、まことに寥寥たるものであるが、そうした中で、清初の學者陳祚明は、協の詩を謝靈運の「風度」をひらくものとして、特にその「寫景の生動」を、魏以來いまだこれあらざるもの、とまで稱揚している（采叔堂古詩選卷十二晉四）。陳氏の文章には、自らの評文に自らが醉つているようなふしが見うけられ、わたくしとしては、そこに誇張を感じ、いささかその說は採りがたいのであるが、張協の寫景の巧みさは、また何焯によつても指摘されている（義門讀書記）。何氏は、前揭雜詩第四首のうち、輕風摧

勁草、凝霜竦高木、密葉日夜疎、叢林森如束、の四句を擧げ、鍾記室のいわゆる巧みに形似の言を構うとはこれである、という。ほんの輕い風、しかしそれは嚴しい秋の氣をふくんでいるために、勁い莖をもつ野の草を摧き伏せ、冷たく凝結した霜は、そそり立つ孤木を竦みあがらせる、一日一日疎らになつてゆく木木の葉、叢林はそのために、束ねた柴のようにささくれ立つて見える——。たしかに、一つ一つのことばが、秋の風物をリアルに訴えて來る、それは詩句である。何氏の指摘は正しいであろう。なおまた、現代の文學史家たちも、協の詩の寫景の巧みさにふれることを忘れていない（陸侃如・馮沅君「中國詩史」中、林庚「中國文學簡史」上）。

詩のもつリアリズムは、また詩人の微細なものへの鋭い感覺によつて、うらづけられるものであろう。ところで雜詩第一首は、古詩十九首をふまえつつ、孤閨を守る佳人の憂いをうたうが、その全詩をあげれば次のごとくである。

秋夜涼風起　秋夜　涼風起こり
清氣蕩暄濁　清氣　暄れたる濁りを蕩う
蟋蟀吟階下　蟋蟀は階の下に吟じ
飛蛾拂明燭　飛蛾は明燭を拂う
君子從遠役　君子　遠役に從い
佳人守煢獨　佳人　煢獨を守る
離居幾何時　離居すること幾何の時ぞ
鑽燧忽改木　燧を鑽るに忽ち木を改む
房櫳無行跡　房櫳に行の跡なく
庭草萋以綠　庭草　萋として以て綠なり
青苔依空牆　青苔は空き牆に依りそい
蜘蛛網四屋　蜘蛛は屋の四もに網す
感物多所懷　物に感じては懷う所多く
沈憂結心曲　沈き憂いは心の曲に結ぼる

ここで詩人は、離居のさびしさを深める風物として、次の二句をうたい込んでいる。青苔依空牆、蜘蛛網四屋——苔と蜘蛛の網、それは詩人の注意が、微細なものに吸い寄せられていることを示す。のちの齊梁の時代に入つて、詩人たちが、好んでそれらをうたつたことも、その一つの證左となろう。苔と蛛網のそれぞれは、協以前の詩に見え、

彼と同時代の先輩たち、たとえば張華は、蛛網を、

蓁葭　牀下に生じ
蛛蝥　四壁に網す　（雜詩）

とうたい、陸機は苔を、

春苔　階除に暗く
秋草　高殿を蕪う　（班婕妤詩）

とうたうが、この二つの景物を、一聯の句に詠みこんだのは、協のこの詩をもつてはじめとするであろう。そして、齊の江淹が、その悼室詩第五首に、

眉を結んで蛛網に向かい
思いを瀝いで青苔を視つむ

と、單に外的な景物としてでなく、詩人の心に、すいこまれて來るものとして、これらの微細な對象を詠じて以來、それは、南朝の詩人たちによつて、人間のさみしさやうれいを深める景物として、好んで採りあげられるようになつた。協の詩は、すくなくともその一つの原型であるといえよう。またこうしたこまかな寫景は、のちの山水詩の一つの源でもあるように思われる。

さて次に、この詩のうたい出しの二句に眼をうつしてみよう。

秋夜　涼風起こり
清氣　暄れたる濁りを蕩う

秋の氣のすがすがしさをうたう第二句は、この詩以前にはなかつた一つの新鮮なことばづかいであろう。何悼は、詩家の字を鍊り句を琢くこと、景陽に始まり明遠（鮑照）に極まる、とまでいつている（前掲書）[註一]が、たとえそれほどではないにしても、この句が、梁の劉孝威によつて、

清陰　暄濁を蕩す（望雨詩）

とそのままねられたことを見ても、一種の新鮮さをもつ發想であつたことは、認められよう。

こうした新しい發想は、ほかの詩にもいくつか見出される。[註二]たとえば同じ雜詩の第二首、

大火流坤維　大火のほしは坤維のかたに流れ
白日馳西陸　白日は西の陸に馳す
浮陽映翠林　浮う陽は翠林に映じ
廻飈扇綠竹　はせ廻る飈は綠竹を扇ぐ

飛雨灑朝蘭　飛雨　朝蘭に灑ぎ
輕露棲叢菊　輕露　叢菊に棲む
龍蟄喧氣凝　龍は蟄まりて喧れたる氣も凝り
天高萬物肅　天高くして萬物肅まる
弱條不重結　弱かき條も重ねては結ばず
芳蕤豈再馥　芳しき蕤も豈に再び馥らんや
人生瀛海內　人　瀛海の內に生まれて
忽如鳥過目　忽しきこと鳥のわが目を過ぐる如し
川上之歎逝　川の上に逝くを歎ぜしは
前脩以自勗　前脩の以て自ら勗めしなり

人のいのちの短かさ、時間の經過のすみやかさを、白駒の隙（あるいは郤）を過ぐるがごとし、とする比喩は、莊子（知北遊篇）や史記（留侯世家）などに用いられており、それはまた以前の詩人によつて、遠行の客に（古詩十九首）、あるいは暮春の草に（徐幹室思詩）たとえられたが、「忽如鳥過目」という句は、獨創によるものであり、註三のちに淵明が、倏かなること流電の驚くが如し、とうたつた比喩の用い方と同じく、詩人の新しい着想といつてよいであろう。何焯は、杜甫の送蔡希魯都尉還隴右因寄高三十五書記詩に見える、身輕一鳥過、槍急萬人呼、の句はこれにもとづくとし、仇兆鰲また典據として指摘しているが、杜甫の句が、あるいはその獨創によるものであつたとしても、協の句それ自身、當時一種の新しさをもつてうけとられたにちがいない。時代のもつ不安な雰圍氣、それにつつまれて沈む詩人の暗い氣持を、雨に託してうたう詩（たとえば雜詩第十首）が、前述したように、杜詩の中にもいくつか見え、それらが、二人の詩人の作品のすぐれた部分を占めていることなどから、杜甫が、たとえごくかすかなものであれ、この詩人から影響をうけたと考えられぬことはなく、とすれば、何・仇兩氏の指摘もまた、意味のないことではないかも知れぬ。

ついでにいえば、この詩の

飛雨　朝蘭に灑ぎ
輕露　叢菊に棲む

の第二句、露が棲む、菊をねぐらとする、という措辭もまた新しいものであろう。

雜詩第三首は、次のようにうたわれる、

金風扇素節　金風　素節を扇ぎ
丹霞啓陰期　丹霞　陰期を啓く
騰雲似涌煙　騰がれる雲は涌く煙に似て
密雨如散絲　密なる雨は散ぜし絲の如し
寒花發黃采　寒花　黃彩を發し
秋草含綠滋　秋草　綠滋を含む
閑居玩萬物　閑居して萬物を玩び
離群戀所思　群れを離れて思う所を戀う
案無蕭氏牘　案には蕭氏の牘なく
庭無貢公綦　庭には貢公の綦なし
高尙遺王侯　高尙　王侯を遺れ
道積自成基　道積もりて自のずから基を成す
至人不嬰物　至人は物に嬰われず
餘風足染時　餘風　時を染むるに足れり

この詩のうたい出し、

金風　素節を扇ぎ
丹霞　陰期を啓く

これは、當時の詩一般が美的なりとした、こみ入つた修辭であろう。しかしながら、方角でいえば西をさす概念である金、それはまた季節でいえば秋を意味する、金の風、すなわち秋風が、素い季節、すなわち秋を、「扇ぐ」、どこからともなく送り込んで來た、そしていまやその素い清冽な季節が、目の前にある、とする表現、ことに「扇」という措辭は、特異である。同時代の詩人閭丘沖の三月三日應詔詩（藝文類聚卷四三月三日引）に、微風扇穢、朝露翳塵（初學記卷四歲時部下三月三日の引く所はこの聯を闕く）、の句があるが、協の詩句と對比すべきは、むしろ陶淵明の擬古詩第七首の次の一聯であろう。

日暮れて天に雲なく
春風　微和を扇ぐ

さきにのべた張協と杜甫との間に想定したつながりは、まことに漠然としたものであつたけれども、この詩句に見られる淵明とのそれは、もはやほとんど疑いを容れる餘地のないものであろう。季節が秋から春へ、金風、素節という典據をもつ裝飾的用語が、春風、微和、すなわち微妙なる和やかさ、という平易なことばに轉置されることによつ

て、「扇」という措辭が、如何に生きて來ることか、われわれは、あらためて淵明の詩の、何でもないように見える表現のもつ味わいの深さに、うたれる。と同時に、陶詩のこうした表現が、やはり過去の一人の詩人の發想に、その何ほどかを負つていることをも、忘れてはならないであろう。

張協の詩と淵明の詩との表現における親近性が、その多くの詩語に見られることは、第一章においてふれたが、ここでは、さらに一聯の句をあげておきたい。

流れゆく波は舊の浦を戀い
行く雲は故の山を思う（雜詩第八首）

これは、張協が、邊城の職に任じ（劉履は西北從事中郎の時の作とする）、故郷を想つて作つた詩の一聯であるが、ここでわれわれは、直ちに淵明の歸園田居第一首の有名な句を思い出す。

羈の鳥は舊の林を戀い
池の魚は故の淵を思う

あまりにも似た表現である。ところで、協よりもいささか先輩かと思われる同じ西晉の詩人王讚の、謝靈運傳論に孫楚の零雨詩と併稱されたことによつて有名な朔風詩（文選卷二十九雜詩）に、

人の情は舊郷を懷い
客の鳥は故の林を思う

という一聯があるが、あるいは李善の指摘しない所から見て、協のそれは、獨創であつたのかも知れぬ。それはともかく、王讚にくらべれば、協の方が、對句としては常套的でありながらも、より完成されたものといえよう。淵明が、自己に絶望をしか強いぬ官吏生活を幾度か體驗したのち、そうした環境から疎外された田園の居にもどつた時、あるいはさらに複數の過去の詩人たちの句を、思いうかべつつ、この詩をつくつたのであるかも知れぬ。そしてそうした複數の詩人たちの中に、張協もまたかぞえられてよいのであろう。[註四]

張協のこの一聯の句を、對句としては常套的とよんだように、たとえば先にあげた第二首の、

案に蕭氏の牘なく

庭に貢公の綦なし（第三首）

のごとき、典據の選擇に意をはらわぬ、ほとんど同義語のくりかえしにも似た對句、そして、

重いなる基は志に擬う可く
廻れる淵は心に比す可し（第九首）

の各句下三字に露呈された用意のなさなど、さきには一例をあげて潘岳と比較したが、その對句において、たとえば陸機の詩に見られるような、アンバランスの生む對照、といつた技巧は示されず、詩の完成度という點から、いささかの幼稚さを感じさせる場合が、すくなくはない。しかしながら、ひとたびこの時代の詩一般に眼を轉ずるならば、そうした斷定は、容易に下せないのであつて、この頃の對句は、同じような內容のことを、如何に巧みに二度繰返していいうるか、という一種の實驗にも似た手法であつたと考えてよい。張協もまたその例にもれない。しかし彼が、その手法を寫景に用いた場合、緻密な描寫と新鮮な表現として生かされた點に、われわれは注意すべきであろう。

七

さて以上において引用し、また後章にも引く張協の詩は、詠史詩一首をのぞき、すべて雜詩と題して文選の載せるものである。しかしこれ以外に彼の作品がないわけではなく、晉書本傳に見える七命は、また文選の採る所であり、藝文類聚以下の類書に書きとどめられたものを拾えば、更に二首の詩以外に、六首の賦、八首の銘の斷片がある。しかしこれらの斷片は、すべて當時の文壇を風靡した過度の美文の一例を示すものでしかないようであり、[註一] 七命もまた、當時においては、このジャンルにおける出色の作であつたのかも知れないが、[註二] 本傳が、過去の文人たちにまねて作つたと記錄するように、その內容も、老莊思想を一般的な形でうけとり、帝室に對する讃美をその結びとするといつた、いわば空疎なものである。いわゆる「二陸入洛、三張減價」にいう價とは、おそらくこうした美文の才をも指したのであろうし、これらの作品は、主として彼の前半生において、つくられたものであろう。

彼の詩人としての眞價が、十全に發揮されたのは、やはり雜詩というジャンルにおいてではなかつたか、とわたくしには思われる。文選が、古詩十九首にはじまる雜詩という類、九十數首のうち、その十首までもをこの詩人に占めさせたこと、それは、次に多い曹植の六首、曹丕の二首との差を見るまでもなく、そうした評價をはつきりとあらわしている。

ところでその雜詩とは、詩の如何なるジャンルを指すのであろうか。のちの李商隱にはじまる無題詩についての定說がないように、雜詩についても、いわゆる定說といつたものはないようであるが、われわれはその定義について考える前に、混亂をさけるため、文選に見える分類の一つとしての雜詩と、その分類の中にふくまれる、詩の題としての雜詩とを、一應わけて考えた方がよいようである。そうした上で、前者については、文選卷三十雜擬上陸機擬古詩に附せられた唐の劉良の注「雜とは一類に非ざるをいう」以外に中國の學者の下した定義はあまり見られないようであり、かえつて我が國の學者によつて論議されている。すなわち、萬葉集の歌の分類は文選にもとづくとするのが、近來國文學者の間では、定說となつているようであるが、[註三]文選の分類を意識せずに說く江戸以前の國學者たちの議論、たとえば、鹿持雅澄の萬葉古義總論などは、雜歌の雜の字をクサグサノと訓じ、春夏秋冬のいずれにも分類出來ぬ種種の歌と解している。これは、劉良のいう「一類に非ざるもの」とする說と一致する。そしてこれらの說に對する異論は彼我の學者の間にもあまり見うけられぬようである。

それに對して、後者、すなわち詩の題としての雜詩、いいかえれば、王仲宣雜詩という場合のそれについては、二說にわかれる。その一は、唐の王昌齡の詩格からの轉載とされる文鏡祕府論論文意の說、

古人の作る所、元と題目あり、選びて文選に入るるに、文選その題目を失し、古人これを詳かにせず、名づけて雜詩と曰う。

とするのが、それである。ところで先にわたくしが、文選の分類としての雜詩、詩題としての雜詩、と分けて考えようとしたのは、單に混亂をさけるための、便宜的な處置で

しかなかつた。文選の選者にそうした意識があつたかどうかは全く疑問であり、むしろ兩者は統一して考えられた方が妥當であろう。とすればこの論文意の說は、後者には一應あてはまつても、前者にあてはめられることは出來ない。何故なら、雜詩という分類の中には、四愁詩、朔風詩、思友人詩など、「題目のある」詩が多くふくまれているからである。

では第二の說を見てみよう。それは王粲の雜詩に施された李善の注によつて代表される。

雜なる者は、流例に拘(こだわ)らず、物に遇いて卽ち言う、故に雜というなり。

そして六臣注のうち、李周翰の次の二つの說は、これを襲つたものと考えられる。すなわち同じ詩の注に、

興致　一ならず、故に雜詩という。

といい、また同じく雜詩の分類の中にふくまれる盧諶の時興詩に、

時興とは、時物に感じて、情を興喩するなり。亦(また)雜詩の類。

と注するのが、それである。これらの說ならば、詩題としての雜詩にあてはまるばかりでなく、文選の分類である「雜詩」に對する定義としても不安はすくないようである。李善のいう意味は、一定の範疇を意識することなく、また定まつたモチーフをもたない、というほどのことであろう。文選の詩の他の分類、たとえば公讌、贈答などのように、一定の枠にしばられず、詩人の感興の赴くままにうたわれた詩、これを音樂にたとえれば、われわれがショパンにその代表的作品を見出す Impromptu というジャンルが、それにあたるであろう。文選の雜詩という分類の中には、それが雜詩と題されていると否とを問わず、たしかにそうした作品が集められているようである。したがつて最初にあげた劉良の「一類に非ず」とする說は、單に雜という字のみの定義であるか、または雜詩というジャンルの消極的な面を指摘したにすぎないと考えてよいであろう。

以上わたくしは、文鏡祕府論の說にくらべて、李善の定義をより適切なものと考える。[註四] とすれば、文選の同じ分類の一つである「詠懷」と、それは全くかわらないジャンル

であるといえようし、事實內容からいつてもそうである。また文選の體裁をついだといわれる唐文粹以下の總集では、雜詩の類を立てず、その大部分を述懷という類の中に入れていることも、雜詩と詠懷の內容の類似を側面から示すものであろう。[註五] 文選に詠懷という一類が別に立てられたのは、阮籍に同じ題の連作が多くあつたからかも知れないが、そのことについては別の機會に讓りたい。ところで、陶淵明雜詩と題して文選に載せる二首の詩は、實は本集では飲酒と題されるものの第五首及び第七首である。ここからも若干の問題が派生して出て來るようであるが、それはしばらくおくとして、飲酒の詩かならずしも酒がテーマではない。盃をふくみつつ、心に浮びまた消えるもろもろの想念を寫した、これもまた卽興的な詩であると考えてよく、それが雜詩と題されて文選に入れられたのも、不思議はないようである。ところで、張協はこうしたジャンルの詩に、すぐれた作品をのこしているわけであり、すくなくとも文選の選者に從えば、漢魏六朝を通じて、この形式において、最もすぐれた詩人であつた、とされる。このことは、張協という詩人の性格を、一つの側面から示しているように、わたくしには思われる。形式主義、あるいは形式美至上主義の支配的であつた當時の文壇の中にあつて、外物に觸發された心情を、詩の一定の範疇を意識することなく、眞率にうたいあげることに、最もすぐれた才能を發揮した詩人、彼は、やはり「晉の群才」の中で、いささか異質な存在であり、異質な面をもつことによつて、當時の形式美に流れた風潮の中で、中國の詩の傳統をうけつぎ、それを深め、次の世代へ手渡した詩人の一人であるといえるのではあるまいか。陶淵明の遺した十二首の雜詩が、彼の作品の中で重要な位置を占め、彼もまたこのジャンルにおいてすぐれた才能を示したことは、張協を文學史の流れの中で評價する際に、何らかの示唆をふくむようにも思えるのである。

八

文選の詩をあつめてこれに注を施した元の劉履の選詩補注は、その凡例にもいうごとく、詩をその時代背景と關聯させて說く、という態度をとる、早い時代のこころみの一

つであろう。

たとえば、漢代の清廉の士二疏（疏廣・疏受）を詠じた張協の詠史詩（文選卷二十一）には、注していう、

景陽、時に旣に疾いに託して屛居す、故にその事を詠じてもつて當代の錄位を持し位を固る者を諷す。且つ首めに、西漢の朝野、歡娛の盛んなるを言い、もつて今の然らざるを見す、その意微なり。

淵明の詩その他にも見えるように、三良を詠じ、二疏をうたうことは、當時の一つの風潮であつた。しかしそうした側面からの考慮をはらうことなしに、この注は、詩と史實とを直線的に結びつける。第五章にその全篇を引いた雜詩第四首に施す劉履の注は、更にくわしく、更に具體的である。まず、この詩は、朝綱の紊亂を目のあたりにした詩人が、國祚の永えならざらんことを憂えて詠じたもの、と斷定され、たとえば、うたい出しの一聯、朝霞の日を迎え、丹氣の暘谷に臨む、とは、晉の惠帝の初、權姦の國を柄にし、その氣勢烜赫たるに比えて、亂のようやく起こらんとするを示す、と指摘するごとくである。以下各句はすべて寓意をもつとし、そのうらづけとなる史實が指摘される。こうした方向での詩の解釋は、かえつて詩の正しい理解と鑑賞を妨げる一面的な斷定へと陷りやすい危險性をもつであろう。たとえば詠史と題される詩が、その發生の動機として、現實に對する不滿を過去の人物に託して發散させるという政治的な意味を含んでいたとしても、そうしたテーマが、多くの詩人たちに採りあげられ、典據や對句の技巧をためし、それをてらう習作としてつくられていく中で、眞實の感動を伴わぬものへと墮していつたことは、後世の類書の中に收められた多くの作品が示している。そうしたことへの考慮をはらうことなしに、詩と史實とを直線的に結びつけることは、詩の正しい理解をゆがめるであろう。さらにまた、そうした傾向は、詩人の豐富な才能、詩のみのもつ可能性、いいかえれば、詩が、その技巧をもふくめて、複雜な形で示す美、あるいはちからとよんでもよいもの、への眼をとじさせる危險性をも、ふくむであろう。しかしながら、その全く逆の方向、詩を、何の附加的な要素もなしに、それ自體として鑑賞することこそが、正しい評價へ

導く唯一の道であるとする態度も、また十全なものとはいえず、われわれと詩人との間によこたわる時空の隔絶の程度に、その不充分さは比例するであろう。さらにいえば、そうした時空の隔絶をも超えて、われわれの感性に直接うつたえて來るもの、それが詩の示す眞實であろうし、それこそが不可缺のものなのであるが、と同時に、それが詩の示すすべてではない。そのすべてへ、少しでも近づくために、われわれは詩人の生きた時代と、その時代の中での詩人の生き方を知ろうとする。そうした意味で、劉履の指摘は、われわれに、一つの見方を提供してくれている。

ところで張協の詠史詩は、二疏をその對象として採りあげた、最も早い時代の作品の一つであろう。それは次のようにうたわれる。

昔在西京時　昔在　西京の時
朝野多歡娛　朝も野も歡娛多し
藹藹東都門　藹藹たる東都の門に
群公祖二疏　群公　二疏を祖る
朱軒曜金城　朱ぬりの軒は金城に曜き
供帳臨長衢　供らえし帳は長き衢に臨む
達人知止足　達人は止むことと足らえることとを知り
遺榮忽如無　榮を遺てて忽ち無きが如し
抽簪解朝衣　簪を抽いて朝衣を解き
散髮歸海隅　髮を散じて海隅に歸る
行人爲隕涕　みち行く人は爲に涕を隕とす
賢哉此丈夫　賢なるかな此の丈夫
揮金樂當年　金を揮いて當年を樂しみ
歲暮不留儲　歲暮に儲えを留どめず
顧謂四坐賓　顧みて四坐の賓に謂う
多財爲累愚　多財は愚なるものに累いを爲すと
淸風激萬代　淸風　萬代に激し
名與天壤俱　名は天壤と俱にあり
咄此蟬冕客　咄たり此の蟬冕の客
君紳宜見書　君が紳に宜しく書せらるべし

むかし西の長安を都とした漢の御世、朝も野も歡娛にみちていた、といううたい出しには、劉履もいうように、詩人の目前にくりひろげられた世界との對比から生まれた、

ある感慨がこめられているのかも知れない。しかもそこから去つて行つた疏廣、疏受という二人の人物、その理由を詩人は、達人は止足を知る、と簡潔にのべる。達人、それは淵明が、達人は其の會を解す、あるいは、達士は爾らざるに似たり（共に飲酒の詩）、とうたつた理想の人物であり、張協がのぞんだのもまたそうした境地、すなわち當面の狀勢に流され、目の色をかえて利欲を追うのでなく、この世界を支配する法則に對して深い理解に達した姿、であつたのであろう。

故郷にかえつた二疏は、晩年のためのたくわえをかえりみることなく、皇室拜領の金子を惜しげもなくつかつて鄉黨と歡をつくす、揮金樂當年、歲暮不留儲。金を揮う、この語は淵明の詩にも歸田ののちのこととして、金を揮うことなしと雖も、濁酒いささか恃むべし、とそのままつかわれている（飲酒第十九首）。他の詩人にこうした造語は見當らぬようであり、とすれば、それは張協の詠史詩が、二疏を詠じた代表的な詩として、淵明をもふくめた後世の詩人に意識されたことを示すのであろう。

ところでこの詩は、そうした新しい詩語をふくみつつも、詠史詩の通例として、全體から見れば、二疏のことを散文で記述した漢書疏廣傳の記事がそのまま凝縮されている、といつた感を免れえない。しかしながら、

咄　此のよの蟬冕き客びとよ
君が紳に宜しく（二疏の名を）書きとむべし

という結びの句に見えるはげしい諷刺は、この作品が、單に與えられたテーマを、巧みにうたいこなすための習作でないことを示している。そしてこれが、彼の屏居以後のものであるかどうかは別として、當時の祿位をむさぼるものたちへの刺り、とする劉履の指摘は正しいであろう。

三國のあとをうけて國をたてた西晉の武帝司馬炎は、その政權を固めるために、同族の二十人あまりを郡に封じて、王と稱させた。しかしそれはかえつて國家を混亂に導くたねをはらんでいた。かれらが、まだその封國にゆかず、王とは名のみの中央官吏としてすごした時代、それは三國の永い動亂のあと、その收拾についやされた時期とみてよい。しかし咸寧三年（二七七）、王たちはその國にゆき、自らの

領土と軍隊をもち、文武の官僚は、王によつて自由にとりかえられるようになつた。太康元年（二八〇）、呉が滅されて、晋の軍事は一應おさまり、約十年の小康狀態が保たれる。しかし惠帝司馬衷の卽位（二九〇）後、政治の實權は、外戚楊駿に握られ、やがて凡愚の帝司馬衷の妻賈后が、權謀術策を用いて楊を殺し、更に楊に直接手をかけた楚王瑋に、汝南王亮を殺させ、次には瑋をも殺してしまう。こうした中央での混亂をきつかけに、割據して勢力をたくわえていた王族たちが叛亂を起こす。これが、のち外族によつて西晋の王朝のほろぼされる直接の原因ともなつた、八王の亂であり、戰亂は約十五年もつづく。さきにもふれたように、張協が政治の場から身を引くのは、それが終束を見た後である。すなわち、彼の官吏としての生活は、こうした混亂の中で行われた。中央であれ、地方であれ、すべての官吏は、どれかの王族の一派にくみすることを、おそらく強いられたであろう。自らの態度の決定は、常に近い將來の生命の危險を感ずることなしには、行われなかつたにちがいない。そこから醜い打算や反目がうまれる。小康を保つたといわれる太康年間の十一年、それは後世の評家たちも指摘するように、文人たちの最も活動した時期だといわれる。しかしそれも、こうした混亂の時代を前後にはさんでの小康狀態であり、ここでも彼らが、派閥の爭いの圈外にいることは、むつかしかつたにちがいない。當時の宮廷には、實權者賈謐のもとに、有名な文人たちの一つのグループがあつた。彼らは、二十四友とよばれた。外見統一的に見えるそのグループの中にもまた、昇進と保身のためのへつらいと反目とがうずまいていた、と史書の記述には見える（晋書賈謐傳、劉琨傳）。そして彼らの生活は、のちの唐の詩人によつて、次のようにうたわれる。

晋武　呉を平らげて歡燕を恣にし
餘風　靡靡として朝廷變ず
世を嗣ぐもの衰微せしに誰か肯えて憂えん
二十四友　日日空しく追い遊ぶ
（韋應物金谷園歌）

陸機、陸雲、潘岳、左思、すべてその仲間であつた。しかし、文人として彼らと併稱された張協は、なぜかこのグ

ループに入つていない。としても、彼が、八王の亂の時期に、河間王のもとで內史をつとめたという事實は、彼もまた派閥爭いの渦の外にいられなかつたことを示す。そうした史實をふまえて、彼の詠史詩は、よみうるであろうし、またよまれねばならぬであろう。すなわち、混亂のうみ出した醜い爭いへの非難と警告を、この詩はふくんでいると考えてよい。

二十四友のうち、有名な文人でそのいのちを全うしえたものはすくない。また、この時代の前後、魏晉南北朝とよばれる時代に、非業の死をとげた有名な文人たちの數は、あまりにも多い。嵇康・張華・石崇・陸機・陸雲・歐陽建・潘岳・劉琨・郭璞・盧諶・范曄・謝靈運・鮑照・王融・謝朓など、すべてひとの手にかかつて殺されている。そうした危險をさけるには、よほどの保身の術と偶然の幸運にめぐまれるか、あるいは、魏の徐幹がそうであつたように（呉質の魏太子に與うる牋）、そうしたあらそいの場から身をひく以外に方法はなかつたであろう。中國の士人階級にとつて、後者の道は自らの政治的社會的生命の抹殺を意味したけれども。

張協は後者を選んだ。社會的生命の抹殺をそれが意味するとすれば、身をひくこと自體が、當時にあつては一つの抵抗であつた、と考えてよい。陶淵明のかたくなまでの隱遁生活の固持が、やはりいま述べた生命への危惧とつながることをにおわせ、ここにも張協との、その姿勢の類似を、わたくしは見出すのであるが、[註一] 詩におけるそのあらわれ方には、やはり異つたものがある。簡單にいえば、それは單純なものと複雜なものとのちがいである。同じく二疏を詠じた詩、それは彼らの共通の關心を示すものとして興味があるが、ここにも、そうしたちがいはあらわれている。協が、

昔在（むかし）　西京の時
朝も野も歡娛多し
藹藹たる東都の門
群公　二疏を祖（おく）る

と史實をまつすぐに提示しつつ、さらに二疏の隱退後の生涯へとうたいすすむのに對し、淵明は、

大象　四時を轉じ
功成る者は自ら去る
借問す　衰周より來のかた
幾人かその趣きを得たる
目を漢廷の中に遊ぶれば
二疏復た此の擧あり

と屈折した提示の仕方を見せる。そして、二疏を稱揚する場合もまた、協は、

清風は萬代に激し
名は天壤と俱にあり

と常套的であるのに對し、淵明は、

誰か云う　其の人も亡ぶと
久しくして道は彌いよ著わる

と屈折させてうたう。こうした表現、あるいは詩の構成における差異は、他の作品からもうかがわれる。協の雜詩はそのほとんどが、先に景を述べ、後に情をいう構成をとるのに對し、淵明においては、たとえば雜詩十二首、飲酒二十首など、同じく連作でありながら、その一一の詩の構成は多様であり複雜である。そうした複雜さが、また淵明の作品に深さと幅を與える、一つの大きな要素となつているように思われる。

前述のごとく、政治の場から身をひくことは、それ自體その人の社會に對する一つの抵抗であつたといえようが、詩人は、身をひくだけでなく、その抵抗を詩にうたう。陷穽の多い社會の中で、その詩は、いきおい隱微に、晦澁にならざるをえない。さきにあげた雜詩第四首を、劉履の示唆をてがかりとしつつ讀むならば、協の詩もまた、その隱微さにおいて、しかく單純でないといえる。しかもそうした讀み方によつて、この詩が、その表現の新鮮さからうつたえて來るもの以外に、あるきびしさをも含むことを、たとえば、疇昔は時の遲きを歎き、晩節には年の促るを悲しむ、という詩句からも、よみとれるであろう。しかしながら、劉履の指摘を一應容認した上で、これを、同じような狀況のもとでの作と考えられる、淵明の述酒詩とくらべるならば、やはり兩者の間に、濃度の差、いわば單純なものと複雜なものとのちがいを見出さざるをえないであろう。

述酒詩は、それの含む意味がいまだ充分に解きつくされてはいないけれども、先人たちの注に助けられつつこれを讀めば、同じく隱微とはいうものの、その一一の詩句が、單に陰慘なものの姿の雰圍氣描寫としておわらず、屈折してひそめられた典據をもつようであり、これにくらべれば、協の詩は、きびしいものをもちつつも、その底はやはり淺いといわざるをえまい。しかし、そうしたちがいも、淵明の詩人としての大きさ、その底の深さを再認識させこそすれ、張協という詩人を、はなはだしくおとしめることには、ならないであろう。

張協におけるこうした隱微な表現は、

黑蜴躍重淵　黑蜴　重淵に躍り
商羊舞野庭　商羊　野庭に舞う
飛廉應南箕　飛廉　南箕に應じ
豐隆迎號屏　豐隆　號屏を迎う

と、そのうたい出しにおいて、古代の神話をふまえた重々しいことばをつらねつつ、いつやむともない雨の到來をつげる、雜詩の最後の一首にも、示される。詩は次のようにうたいつがれていく。

雲根臨八極　雲の根は八つの極に臨み
雨足灑四冥　雨の足は四もの冥に灑ぐ
霖瀝過二旬　霖瀝は二旬を過ぎ
散漫亞九齡　散漫たることかの九つの齡のあめに亞ぐ
陛下伏泉涌　陛の下には伏泉の涌き
堂上水衣生　堂の上には水衣を生ず
洪潦浩方割　洪潦は浩として方に割をおこし
人懷昏墊情　人びとは昏墊の情を懷く
沈液漱陳根　沈き液は陳き根に漱ぎ
綠葉腐秋莖　綠葉　秋莖　腐る

一つの對象を多方面から觀察し寫し取ろうとする「賦」の手法に似たものが、ここからは感じとれる。かく、ものみなをくさらせつつ降りつづく雨は、次のような場面を詩人のまのあたりに展開する。

里無曲突煙　里には曲突の煙なく
路無行輪聲　路には行く輪の聲なし
環堵自頹毀　環き堵は自のずから頽れ毀れ

垣間不隱形　垣間も形を隱さず
尺燼重尋桂　尺かの燼は尋き桂よりも重く
紅粒貴瑤瓊　紅なるきびの粒は瑤瓊よりも貴し

こうした苦しみの中で、詩人は、いにしえの高士、於陵子・黔婁生への企望をのべて、うたいおさめる。

君子守固窮　君子は固窮を守り
在約不爽貞　約に在りても貞に爽わず
雖榮田方贈　田方の賠りものを榮くすと雖も
慙爲溝壑名　溝壑にすてらるる名をなすを慙ず
取志於陵子　志を於陵子に取り
比足黔婁生　足らえるを黔婁生に比せん

固窮、それは論語衛靈公篇の「君子も固より窮す」というのにもとづき、淵明がそれに「窮を固る」と、貧窮の中にあつて清潔さをみださない積極的な態度をあらわす意味をもたせて、しばしば用いたことは、よく知られているが、そうした用法が淵明にはじまるのでないことを、われわれはここで知る。[註二]

それはともかく、長くふりつづく雨の描寫から、固窮という自らの生活態度を提出する、そうした飛躍から考えても、この詩は、明らかに單なる實景の描寫ではなく、社會の不安へのおののきと、それを生んだものへの抗議を、そのうらに含んでいるであろう。

「里に曲突の煙なく、路に行輪の聲なし」、曲突とは、李善の注によれば、傍にある薪に加熱せぬよう、曲げられた煙突のことであるという（漢書霍光傳參照）。災害を未然にふせぐそうした處置が、あざわらわれてでもいるかのように、今は傍に薪さえもなく、曲突は煙もはかずに空しくつつ立つている。と、この句は讀めるのかも知れぬ。ともあれ、この一聯は、人民たちが極度に追いつめられ、もはや聲もなくひそまりかえつたぶきみな社會の姿をうつしたものであろう。かく人びとを追いつめ苦しめて來たもの、それは霖雨としてうたわれ、そのほんとうの姿は隱微にかくされている。

しかし、このようなゆがんだ社會に對する抗議、そしてまた自らの境遇に對する不滿は、常にかく隱微なあらわれ方をするわけではない。すなわち、さきにあげた詠史詩の

結びの句のごとく、率直な形で提出される場合が、ほかの詩にもなくはない。

高尚　王侯を遺れ
道積もりて自のずから基を成す（雜詩第三首）

宮仕えを拒否することによつて、自らの純粋さを守りうるとすることば、あるいはまた別の詩に、南越へ章甫という名の冠を賣りに行つて、相手にされなかつたという莊子に見える話にたとえて、周圍から孤立した自らの姿をうたい、しかもそれは、「流俗　昏迷多き」がためであり、「此の理　誰か能く察せん」とするうたいぶりなどが、そうした率直な表現の例である。

昔我資章甫　昔し我れ章甫を資れて
聊以適諸越　聊か以て諸越のくにに適かんとす
行行入幽荒　行く行く幽荒に入るに
歐駱從祝髮　歐駱（越王の姓號）のひとは祝き髮の從にす
窮年非所用　年を窮うるまで用うる所に非ず
此貨將安設　此の貨　將に安くにか設かん
瓠瓠夸瑰璠　瓠瓠は瑰璠に夸り
魚目笑明月　魚目は明月を笑う
不見郢中歌　見ずや　郢の中の歌の
能否居然別　能と否と居然として別かるるを
陽春無和者　陽春のうたのよろしきには和する者なし
巴人皆下節　巴人のうたには皆な節を下す
流俗多昏迷　流俗は昏迷多し
此理誰能察　此の理誰か能く察せん　（第五首）

そのあらわれ方が隱微であれ、あるいは率直なものであれ、彼の詩には、ゆがんだものにたちむかい、その前にくずおれぬ、一種の勁さがあり、それが彼を、單なる表面の形式的な美のみを追求し、それをもてあそぶことによつて、逆にそれにふりまわされる、そうした風潮に染まりきらぬ詩人としたのであろう。「骨氣挺拔」とまではいえぬにしても、「徒に造語に工みなるのみにあらざるなり」という何焯の指摘（前掲書）は、正しいであろう。

ところで、詩品の鮑照に對する評に、

景陽の俶詭を得、茂先の靡嫚を含む

なる語がある。俶詭ということばは、呂氏春秋（侈樂篇）にも見えるが、詩品集釋の著者葉長青も指摘するごとく、ここではむしろ莊子を思い起こすべきであろう。すなわち莊子天下篇には、莊周の人物と言動を評していう、

其の辭は參差たりといえども、而も俶詭觀る可し。

郭象はこれに注を施していないが、俶詭なる語は、謬詭とその文字をかえて、德充符篇にも見える。近人顧實によれば、齊物論篇に弔詭なる語あり、弔・謬・俶はその古音通用すという（莊子天下篇講疏）。德充符篇では、叔山無趾とよばれる不具者が、孔子になげつけるきびしい批判のことばとして、

彼は且に謬詭幻怪の名をもつて聞こえんことを斬む

と見え、郭象の注、必ずしも明晰ではないが、「非常」の語をもつてこれにかえているようであり、晉の李頤は、これに「奇異なり」と注する。呂覽、淮南子、漢書等のこれに類した語に施す後人の注も、この範圍を出ないようである。前後勘案するに、それは、ものの平均化された表面からはみ出るもの、あるエネルギッシュな力をひめたもの、に與えられたことばのように思われる。そうして、同じく鮑照に後人が與えた評語「俊逸鮑參軍」（杜甫、春日憶李白詩）の俊逸と、その底邊でつらなることばなのであろう。とすれば、張協に對する批評としては、いささかおだやかでないようにも思えるが、さきに詩品に對してわたくしのもつた疑問、すなわち、鍾嶸の詩に對する評價が、人物評をもいささかふくんでいるのではないかとする疑問が、もし容認されるならば、張協の今は散佚してわれわれの知りえぬ詩の、あるいは言動についての資料をもち、それにもとづいて下されたのが、俶詭という評語であるのかも知れない。そして、そうした要素の微妙なあらわれが、上にのべた彼の詩のもつ一種の勁い muscle としてわれわれに感じとられ、それがまた潘岳などの系統の詩人たちと彼の間に、異種なものを感じさせるのではあるまいか。更にまたそれが、この詩人と淵明との親近性を肯定させる、一つの要素なのであろう。

補注

第二章

一、北堂書鈔は、亢を抗につくり、昔我好典籍、下帷幕董氏、吟詠倣餘風、染軸舒素紙、とその詩をひく。舊唐書經籍志に張抗集二卷あり、唐書藝文志に張抗集三卷あり、同一人物であろう。

二、鄭振鐸「中國文學史」第一册、李長之「中國文學史略稿」第二卷。

三、晉書斠注も臧榮緒晉書を引き、地理志の記事にふれて、本傳は郡名のみ載せたものとしている。

第三章

一、第八章においてふれるように、元の劉履の選詩補注は、史實をふまえて詩をとく態度につらぬかれた書物であるが、ここでも張協について、現在われわれの見うる資料以外は、つかわれていない。

二、亢の傳に、「祕書監荀崧、亢を擧げて佐著作郎を領せしむ」とあり、晉書卷七十五荀崧傳によれば、荀が祕書監となつたのは、三二四年（明帝太寧二年）以後のこと、すなわち亢はこの頃まで生きていたことを示す。

三、現代の文學史家は、左思の生卒を二五〇？——三〇五？としている。

四、張敏については、魏書卷八十四張偉傳に、張偉……太原中都の人、高祖の敏は晉の祕書監、とあるのみで、晉書には傳がない。隋書經籍志に、尙書郎張敏集二卷、としるされ、世說新語俳調篇の劉注に、張敏集頭責秦子羽を引くが、時代考證の手がかりとはならない。

五、御覽卷一百四十五引晉起居注は、これを咸寧三年（二七七）とする。

六、載には元康頌という作品の斷片が遺つている。文選卷二十七顏延之宋郊祀歌李注引。

第四章

一、唐人で張氏兄弟の作品にふれたものはほとんどないようだが、儲光羲に、孟陽題劍閣、子雲獻甘泉、の句があり（酬李處士山中見贈詩）、載の代表作が、詩以外の韻文であること、唐人もそう受取つていたことを示す。

第五章

一、この評については、その各條にわたつて論じたつもりであるが、音韻鏗鏘、すなわち、その詩はひびきのよさにおいて特に秀れていた、とする點については、これを充分に分析するだけの用意がなく、ここではふれなかつた。

第六章

一、元の陳繹曾の詩譜にも、協に對する、逐句鍛鍊、辭工製率（詩紀引）の評語がある。

二、詩以外の作品にも、それは見出される。たとえば登北芒賦（藝文類聚卷七）の「人生の危淺を悼む」などは、それであろう。

平易なことばによりつつ、それは新しい發想の一つの型を示す。人のいのちのふたしかさを、「危淺」の語をもつて表現した詩人は、ほかにすくないようであり、別のジャンルにこれをもとめれば、同時代人としては、わずかに李密の陳情表（文選卷三十七）に見出しうるにすぎないようである。

三、曹丕の大墻上蒿行に、人生居天壤間、忽如飛鳥棲枯枝、なる句あり、あるいはこれが、張協の意識の底にあつたのかも知れぬ。

四、陸機の贈從兄車騎詩（文選卷二十四）に、孤獸思故藪、離鳥悲舊林、の句あり、また古直が歸園田居詩に注するように、潘岳の秋興賦（文選卷十三）の次の句も、この際思い起しておく必要があろう。すなわち、譬猶池魚籠鳥、有江湖山藪之思。古詩十九首の、胡馬依北風、越鳥巢南枝、がこれらの發想の源になるものと思われる。

第七章

一、そうした美文中にも、第六章の註二に示したような、平易な用語による新鮮な表現がないではないが、結論的にいえば、本論にのべたような意義しか、それらはもたぬであろう。

二、七命については、宋の葛立方の韻語陽秋に、その用語を論じた文章があり、ある影響を後世に與えたことが、うかがえる。

三、この種の論文は多いが、伊藤博氏の、萬葉集雜歌の典據をめぐつて（萬葉創刊號、一九五一年十月）によつて、概觀しうる。

四、わが國の學者三浦梅園の詩轍卷六に、このことにふれての議論がある。

五、隋書經籍志總集の項に、宋明帝撰雜詩七十九卷等の記錄があり、これは單に詩集というほどの意味か。

第八章

一、隱遁生活の中で、あるいは隱遁をあこがれる生活の中で、亂れた現實への反撥として稱揚するいにしえの賢人たち、それにも二人の詩人は共通した面をもつ。そしてそれは、當時流行の神仙ではなく、むしろ儒家の書にあらわれる清廉の士の場合が多い。

二、高橋和巳氏によれば、その古い用例は尸子の「道を守り窮を固（まも）れば、則ち王公を輕んず」（文選卷二十二謝靈運登石門最高頂詩李注引）まで遡れるという（吉川幸次郎氏「陶淵明傳」百四頁參照）。